

## 機織具



### ●コレクション・データ

時代 弥生時代中期  
調査 唐古・鍵遺跡第13次調査  
発見年 1982年  
大きさ 上：〔布巻具〕残存長 54 cm  
下：〔緯打具〕残存長 31.6 cm  
展示位置 第2室「布を織る」

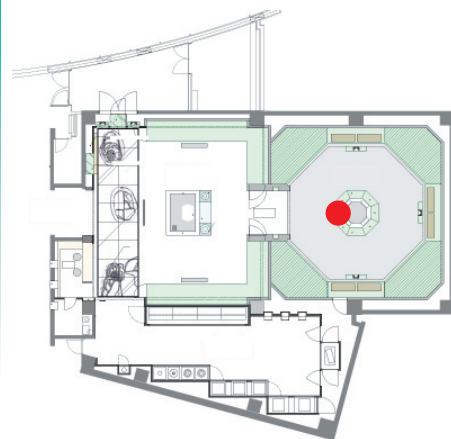
「衣・食・住」と言われるように、衣服は生活文化の中で重要な位置を占めています。考古資料としての衣服（布）の出土はまれですが、製作に関わる機織りの道具は見つかっており、弥生時代の機織りについてもその技術を知ることができます。

機織りとは、二本の経糸を交互に上下させ、その間に一本の緯糸を通すことで、布を織る技術です。その原理は、世界各地で共通し、日本でも西陣織などに技術が受け継がれています。この「織る技術」は、弥生時代に大陸から導入されたもので、二本の経糸を一瞬にして交差させる画期的技術です。これに対し、縄文時代は「編む技術」で、カラムシなどの植物繊維を糸にし、「振り編み」と呼ばれる技法により編布という布が作られました。この技法は簾などを編む方法と同じです。

土しています。

緯打具（写真下）は、経糸の間に通した緯糸を手前に詰める道具です。右半分を欠損していますが、両手による作業に適した形態です。一方、布巻具（写真上）は、織りあがった布を巻きつける道具で、右端の把手は欠損しています。布を巻きつける部分の両端には、精緻な鋸歯文様が刻まれています。このことから、この文様が施されていない中央部分が布幅になると推定され、これでは幅約32センチが布幅になりそうです。これまで他の遺跡で出土した布巻具もほぼ同じですから、弥生時代の布幅を想定することができます。

原始機での復元実験では、糸の紡績から機織りによる布の完成には数カ月が必要で、機織りを担った女性の負担は大きなものだったと思われます。しかし、月日をかけ丹精に織った布は、艶やかな衣服になったに違いありません。



ミュージアム上面図と展示位置